

目的 イラクサは古代以来、山村に住む人々の衣料原料として用いられてきたことは文献によって知られている。私達は先に標題の研究第1報を發表したが引続き調査地域を拡大し、更にひろく利用の実態を明らかにすることを目的に調査・研究したので報告する。

方法 前回の調査は東北5県を対象としたが、それ以外の文献記載地および類似の地域と、中部4県と前回未調査に終わった秋田県の一部、および青森県を加えて調査地を選定し、あらかじめ設定した項目につき、できるだけ老人をえらんで、きょとり調査を行った。

結果 文献記載地・類似の地域を併せて6県、4市、3町、9村、27部落、男13名、女23名、合計36名からの回答をまとめると、イ、文献記載地では例外なく食用に利用している。ロ、文献記載地でも養蚕が主たる生業になった部落、および大麻・カラムシを多く栽培している地域、または階層では、せんい利用の伝承は残らない。類似の地域においても同様である。ハ、文献記載地・類似の地域ともに同部落内で利用・未利用が隣合っているのは、主たる生業と生活階層の差異によるものと思われる。ニ、せんいとしての評価は布に対する切実な要求と技術を有する地域では非常に高く、要求の低いところでは評価も低い。ホ、中部2県(岐阜・富山)と長野以北の4県とでは利用状態に差があるが、前者が商圏経済への移行が早く、後者はおそくまで自給自足の生活が続いたためと思われる。

前回の調査では殆んど選定地で食用・せんい用として利用されていたが、今回の調査では地域によって利用に差があらわれたことは意外であった。今後は岩手・福島など前回では不十分と思われる地域について更に調査を続けてゆきたい。